

地域に適合した高品質肉用鶏の飼養法の確立

誌名	埼玉県養鶏試験場研究報告 = Bulletin of the Saitama Prefectural Poultry Experiment Station
ISSN	03892948
著者	小谷, 秀行 駒井, 一茂
巻/号	23号
掲載ページ	p. 10-13
発行年月	1989年5月

3. 地域に適合した高品質肉用鶏の飼養法の確立 肥育鶏の放飼についての検討 (I)

小谷秀行*・駒井一茂**

緒 言

材料及び方法

県内の梨園、ぶどう園等、樹園地を持つ農家の一部では、園内に鶏を放し飼いにして、下草の除草を図るとともに、鶏の生産物（卵、肉）を利用している。

こうした事例は、複合農業の一環として、非常に興味深い。

そこで、当场保有の特殊肉用鶏「タマシャモ」を、こうした樹園地に放飼することを想定して、場内の放飼場を利用し、タマシャモを放し飼いにし、その問題点について検討を加えたので報告する。

1. 供試鶏

特殊肉用鶏「タマシャモ」

2. 試験区分

鶏の飼育方式により、放飼区とケージ（対照）区の2区分とした。

放飼区は、高さ190cmの金網フェンスに囲まれた76㎡（23坪）の土地を2区分して、それぞれに20羽（雄10羽、雌10羽）を放飼した。また、両放飼場に図1、2のような片屋根の雨よけを作り、ここに円筒型ホッパー（20kg用）を置き、不断給餌とした。

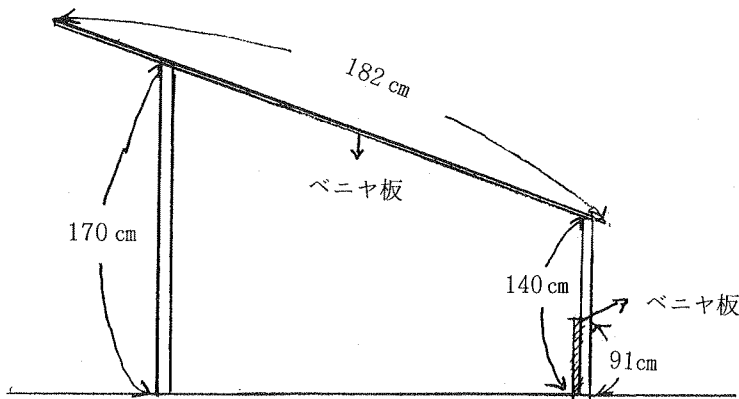


図1 側面図

* Hideyuki Kotani

** Kazushige Komai

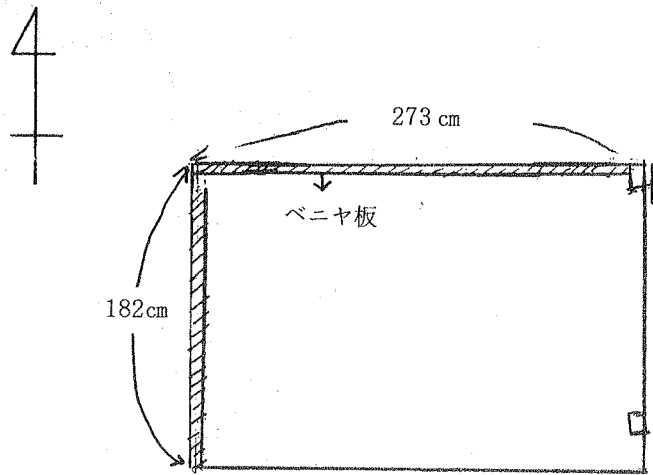


図2 平面図

対照区は、開放ケージ鶏舎で間口90cm、奥行き60cm、高さ60cmの群飼ケージに5羽ずつ収容(坪当たり30羽)して、飼料は自由摂取させた。

3. 供試羽数

1区当たり雄10羽、雌10羽計20羽×2反復で40羽とした。

4. 給与飼料

0～4週齢までは、市販のプロイラー用前期飼料(CP23%、ME3,050 kcal/kg)、4週齢以後は、プロイラー用後期飼料(CP19%、ME3,150 kcal/kg)を給与した。

5. 試験期間

昭和63年8月18日～同年10月27日(6～16週齢)。

6. 調査項目

体重、飼料摂取量、飼料要求率、育成率、解体成績(正肉歩留、可食内臓重量、腹腔内脂肪重量)。

なお、解体調査に供した鶏は、各区の平均体重に近い個体を選び、1区当たり、雌雄3羽ずつ計6羽とした。

その他、ワクチネーションや飼養管理は当場の慣行法により行った。

結 果

2週間毎の飼料摂取量と体重の推移を表1、表2に示した。

飼料摂取量をみると、6週齢から14週齢までは対照のケージ区よりも放飼区の方が少なかったが、14～16週齢では放飼区の方が多くなっていた。

体重についても、8週齢から14週齢まではケージ区の方が大きかったが、16週齢では両区に差がみられなかった。

表1 週齢と飼料摂取量

区 分 週 齢	飼料摂取量(1羽1日当たり)	
	ケージ区	放飼区
6～8	65.8 ^g	54.4 ^g
8～10	75.5	70.1
10～12	87.9	83.4
12～14	108.0	95.4
14～16	123.2	132.0
累 計*	6,384	6,097

* ……総飼料摂取量/総延羽数×70(日)
(6～16週齢)

表2 週齢と体重

週 齢	区 分	体 重	
		ケージ区	放 飼 区
6	雄	625 ⁹	615 ⁹
	雌	532	532
	平均	579	574
8	雄	1,033	893
	雌	871	786
	平均	952	840
10	雄	1,539	1,395
	雌	1,279	1,229
	平均	1,409	1,312
12	雄	1,921	1,846
	雌	1,610	1,592
	平均	1,766	1,719
14	雄	2,409	2,206
	雌	1,949	1,886
	平均	2,179	2,046
16	雄	2,957	2,967
	雌	2,265	2,300
	平均	2,611	2,634

表3に、雌雄を平均した各区の試験成績を示した。

表3 試験成績（雌雄平均値）

項目	区分	ケージ区	放 飼 区
6週齢時体重		579 ⁹	574 ⁹
16週齢時体重		2,611	2,634
増 体 量		2,030	2,060
飼 料 摂 取 量 (累 計)		6,384	6,097
飼 料 要 求 率 (6 ~ 16 週)		3.14	2.96
育 成 率 (%)		92.5	100

増体量（6～16週齢）はケージ区、放飼区にはほとんど差はないが、飼料摂取量（累計）では放飼区の方が少なかった。

飼料要求率は、ケージ区よりも放飼区がわずかに優れていた。

育成率は、放飼区が100%だったのに対し、ケージ区は92.5%と悪かった。

次に解体成績を表4に示した。

もも肉、胸肉、ささみ重量の生体重に対する比率は、区間に差はなく、正肉歩留（もも肉+胸肉+ささみ重量/生体重×100）についてもケージ区の雄が42.8%、雌42.0%、放飼区の雄が42.0%、雌41.8%と差は認められなかった。

可食内臓重量（心臓、肝臓、ひ臓、筋胃）は、放飼区がケージ区よりも、雄が雌よりもやや上まった。

腹腔内脂肪は、雌雄ともにケージ区が放飼区よりも多い傾向がみられた。

考 察

本試験は、屋外の放飼と開放鶏舎のケージ飼育とを比較、検討したものである。

杉山ら¹⁾は、ブロイラーでコロニー舎を用いて青空飼育を行い、ウィンドウレス鶏舎内の対照区と飼育成績を比較している。

その結果、青空飼育区は発育体重については差がないが、飼料要求率が劣っていたとしている。

今回の試験も発育体重には差が認められなかった。しかし、飼料摂取量は放飼区の方がケージ区よりもやや少なかった。

この理由としては、放飼区は夏の直射日光にさらされ、高温下での飼育となり、食欲の減退を招いたことが考えられる。

次に、育成率についてみると、ケージ区では脚マヒ、肝臓の腫大等マレック病が疑われるへい死鶏が数羽出たが、放飼区では、こうしたへい死鶏

表4 解体成績

項目	性別	雄		雌	
		ケージ区	放飼区	ケージ区	放飼区
生体重		2,957 ^g	2,980 ^g	2,247 ^g	2,263 ^g
屠体重		2,657	2,653	2,000	2,000
正肉					
もも肉		640	653	477	470
胸肉		533	493	393	400
ささみ		92	107	77	77
正肉計		1,265	1,253	944	947
正肉歩留(%) (対生体重)		42.8	42.0	42.0	41.8
可食内臓					
心臓		19.0	17.3	12.5	12.9
肝臓		50.5	48.3	38.6	37.9
ひ臓		5.7	7.0	6.1	5.3
筋胃		52.4	62.9	42.1	46.5
可食内臓計		131.9	135.5	99.3	102.6
腹腔内脂肪		37.5	15.7	67.9	63.0

*……数値は、それぞれ3羽の平均値

はみられなかった。

解体成績は、正肉歩留に区間の差がみられなかったが、腹腔内脂肪量は雌が雄よりも多く、区間では、ケージ区が放飼区よりも多い傾向がみられた。特に、雌は飼育形態との関係が大きいものと思われた。

要 約

特殊肉用鶏タマシャモを場内の放飼場で6~16週齢まで屋外飼育して、屋内ケージ(対照)区と発育成績を比較、検討して以下の結果を得た。

1. 16週齢時体重は、雌雄平均で、ケージ区2,611g、放飼区2,634gとなり、差はみられなかった。
2. 飼料摂取量及び飼料要求率は有意な差が認められなかったが、放飼区の飼料要求率はケージ区よりも良い(0.18)傾向がみられた。
3. 育成率は、放飼区100%、ケージ区92.5%であった。
4. 解体成績は、正肉歩留、可食内臓重量ともに試験区間に差がみられなかったが、腹腔内脂肪は雌が雄よりも多く、ケージ区が放飼区よりも多い傾向が認められた。

文 献

- 1) 杉山和寿・伊東祐孝・山本明・岩堀喜三郎・松浦進：静岡鶏試研報，20, 61-64, 1986.